

# 船井情報科学振興財団 留学生レポート

2013 年 11 月

荒木 淳

## 1. はじめに

私は、2012 年 8 月よりカーネギーメロン大学コンピュータサイエンス学部言語技術研究所 (The Language Technologies Institute of the School of Computer Science at Carnegie Mellon University) の博士課程に在籍しています。この博士課程の入学までに、日本の大学の学部と修士課程 (ともに工学系) を卒業し、日本で社会人として経験を積んだ後、米国の大学の修士課程 (コンピュータサイエンス分野) を卒業しました。私は 30 歳を超えてから米国留学を始めたのですが、初回の留学生レポートでも触れた通り、私はもともと帰国子女でもなく、その留学以前に短期留学の経験もありませんでした。英語力の向上には出願時から苦勞してきており、米国生活も五年目を迎えた今では成長を実感しているものの、それでもまだまだ英語力を伸ばす必要があると考えています。そこで本レポートでは、英語学習について留学準備と実際の留学を通じて私なりに感じてきたことを簡潔にまとめてみたいと思います。誤解を防ぐ意味で、この所感はいくまでか応用言語学や TESOL (Teaching English to Speakers of Other Languages; 他言語話者への英語教授) を専門としない一留学生の主観的な見解に過ぎないことを念の為に付け加えておきます。

## 2. 英語力とは

英語学習について考えるにあたって、まず英語力とは何かを改めて考えます。英語力というのは、個々人の目標によってその定義は変わるかも知れませんが、基本的には英語運用に関わる総合能力であると言えます。これは私が留学準備を始めて数ヶ月くらい経った時のことだったと記憶していますが、そもそも英語を学習する初期の段階からもっと早く知っておけば良かったと思うようになったのは、英語運用に関わる総合能力の構成要素とそれらの相互関係です。つまり、英語力は総合能力であり色々な能力が積み上がって構築されたものであるが、そのうちの能力についてどれだけ習熟すると別の能力にどれだけ作用して全体として英語力がどう向上するかという関係性です。科学的な裏付けのない感覚値であるものの、約 1 年 8 ヶ月の留学準備とその後約 4 年 4 ヶ月の米国留学を通して英語に触れてきた経験から、現時点では私はその構成要素と相互関係を図 1 のように捉えています。この図は、或る言語 L1 を獲得している話者 X が別の言語 L2 を獲得しようとする場合において、どのような能力や知識が必要となり、各々の習熟が各々にどのような影響を与えるかを定性的に示したものです。矢印の太さはその影響の大きさを表しています。図 1 に示される関係は、日本語話者の英語獲得というケースだけでなく、他の言語獲得のケースにおいても一般化して言うことができるのではないかと個人的には推測していますが、ここでは話を簡単にするために L1 を日本語 (母語)、L2 を英語 (第二言語) とします。次節では、図 1 で示される英語運用に関わる総合能力の構成要素とそれらの相互関係について簡潔に述べます。

## 3. 英語力の構成要素とそれらの相互関係

最初に、心理的基礎能力として motivation (動機付け)、技術的基礎能力として grammar (文法)、vocabulary (語彙)、sound system (音声体系)、discourse (談話) の四つの習熟が重要であると考えています。

**Motivation:** この要素が他の能力や知識全ての土台になるという意味で最も重要であると考えています。動機自体は何でも良いと思いますが、長く保てるものが良いと思います。

**Grammar:** これはよく言われることですが、近代日本の伝統的な英語教育（いわゆる受験英語）は、この要素の習熟に力を入れたものになっています。

**Vocabulary:** 恐らく最も地味で、かつ習熟に時間を要する要素なので、技術的基礎能力の中で最も軽視されがちな要素かと思います。この要素の習熟過程では active vocabulary（表現語彙）と passive vocabulary（理解語彙）の差異を意識すること、active vocabulary として使うには単語だけでなく連語を覚えて何度も使うことがポイントと捉えています。

**Sound system:** 個々の音素（母音と子音）の習熟が基本ですが、当然ながら英語にあつて日本語にない音（例えばエルの音）が難点になるので、そういった音を意識的に注意して聴いたり、発音したりすることがポイントと捉えています。また音と音の連続によって変化する音にも注意が必要です。

**Discourse:** ある程度長い文章や意見を述べる際に、日本語に起承転結があるように、英語にも典型的な構造のパターンがあります（例えばトピックセンテンスとサポートセンテンスの構成方法など）。このようなパターンの習熟がポイントと捉えています。

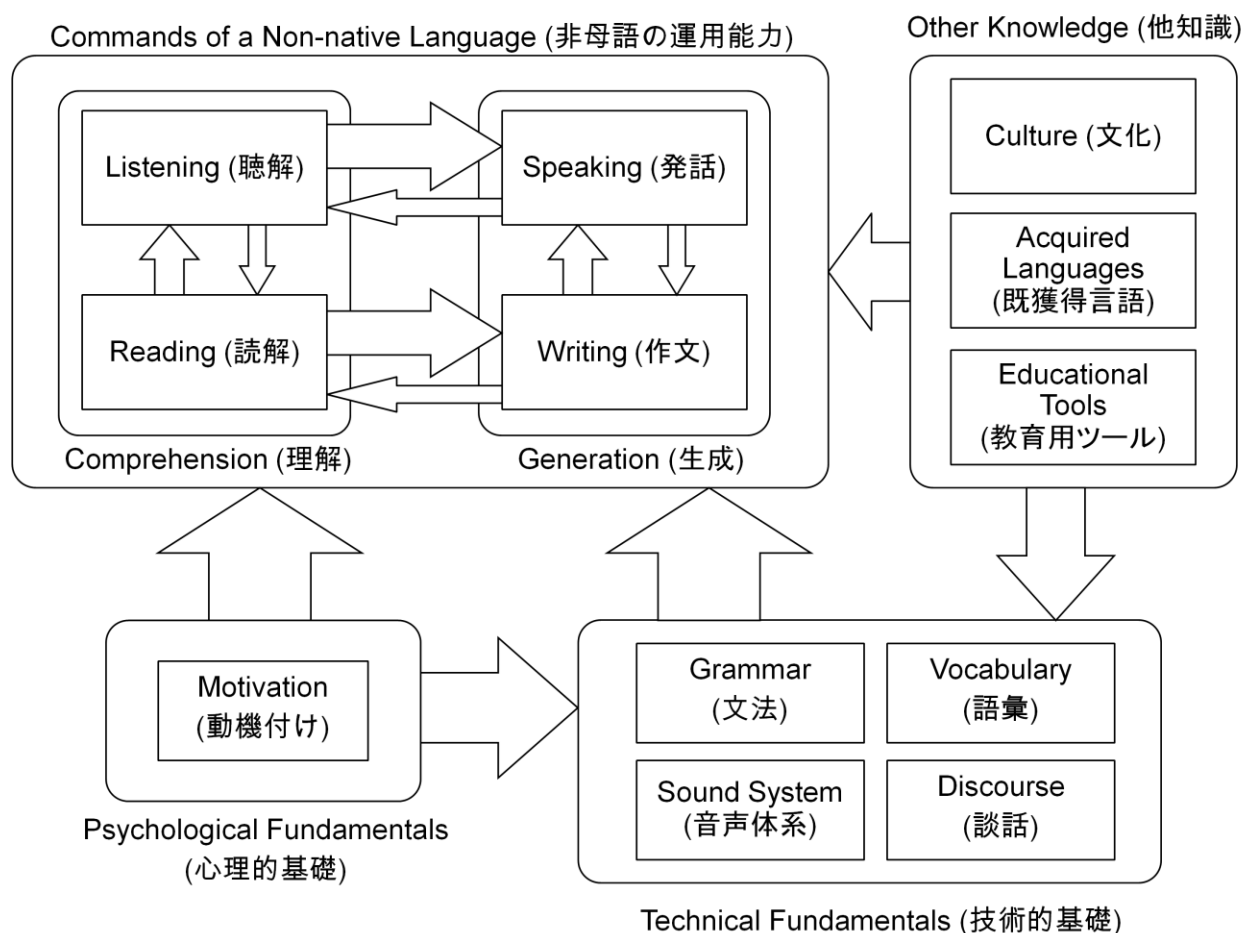


図 1: 非母語を運用するための能力や知識の間の関係

次に、英語力の要である運用能力に目を向けます。この能力は、listening（聴解）、reading（読解）、speaking（発話）、writing（作成）の四つから構成されますが、このうち listening と reading はインプット系、speaking と writing はアウトプット系と、二つに分けることができます。これらの能力は独立的に、または相互補完しながらそれぞれ習熟していくことが可能ですが、基本的には前述の心理的基礎能力と技術的基礎能力に大きく支えられていると考えられます。以下では、そういった相互関係に注目します。

**Listening:** 技術的基礎能力の中で特に大事な基盤となる要素は sound system です。この能力の習熟過程では未知の単語や言い回しに遭遇するので、それらを同時に学ぶことで vocabulary の増大につながります。ここで私が大事だと考えているのは、習熟過程の中でシャドーイングなどの練習を繰り返すことで英語のリズムやアクセントを文字通り体得するようになり、speaking の成長につながるという点です。

**Reading:** 技術的基礎能力の中で特に大事な基盤となる要素は grammar と vocabulary です。Listening と同様に、インプット系の能力なので習熟にはインプットの絶対量を増やすことが大事ですが、習熟過程では未知の語彙を学ぶことで vocabulary の増大につながります。ここで私が重要だと考えているのは、習熟過程の中で出会った文を読み上げたり、ペンで紙に書いたりする練習を繰り返すことで英語の文構造を体得するようになり、writing の成長につながるという点です。

**Speaking:** 英語母語話者との対話が練習になることは間違いないと思いますが、そういった練習が最も効果的になるのは上述の心理的基礎能力、技術的基礎能力、そして listening 能力全てがある程度のレベルを越えた後であると考えています。逆に言えば、そのレベルに達する前の段階ではそれらの能力の成長に集中した方がより生産的な場合があると思います。

**Writing:** この能力も同じアウトプット系の能力である speaking と同様に、習熟にはアウトプットの絶対量を増やすことが大事です。またこれも speaking と同様ですが、ライティングの練習が最も効果的になるのは上述の心理的基礎能力、技術的基礎能力、そして reading 能力全てがある程度のレベルを越えた後であると考えています。

上述の能力の成長に補完的な役割を果たすのが、図 1 の右側に示した other knowledge (他知識) です。ここでは、culture (文化)、acquired languages (既獲得言語)、educational tools (教育用ツール) の三つを挙げます。

**Culture:** 異文化の理解が前提知識として listening や reading に助かったり、vocabulary の増大につながったりします。

**Acquired languages:** 第一言語として日本語を獲得したならば、第二言語として英語を学習する際に注意すべき点を、既に獲得した言語 (日本語) とこれから獲得しようとしている言語 (英語) の比較という観点から考えることができます。例えば、和製英語と言われる語は基本的には英語には存在しない語であるから注意する、といったことです。

**Educational tools:** インターネットによる技術的発展と、いわゆる「グローバル化」という言葉で表現される世界的傾向によって、近年の教育用ツールの発展には目醒しいものがあります。数例を挙げると、記憶理論に基づく単語帳 (flashcard) ソフトウェアや文章添削をベースとした language exchange (言語交換) ウェブサイトなどが言語学習に焦点を当てたものですが、それ以外にも massive open online course (MOOC) が近年充実させている良質な学習コンテンツが英語学習にも効果があることは想像に難くありません。

#### 4. おわりに

英語圏の留学生 (特に博士課程の学生) にとって、英語は勉強や研究をするための道具の一つに過ぎません。ですが、上手に使いこなせないと土俵に上がることすら許されないという意味で重要な道具です。本レポートでは、日本語を母語とし英語を第二言語とする私が大学院留学 (英語圏) の経験を通じて、もっと早くから知っていればより効率的に英語力を伸ばすことができたのではないかと思うことを簡単にまとめました。このレポートで述べた内容は、第二言語獲得の分野に関係しています。その分野でもさらに研究が進み、新たな知見が産み出され、それらの知見から「道具」の習熟に関して切実な必要性に迫られる人の学習に役立てば良いと願っています。